

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530168

研究課題名(和文) グローバル化時代の地域主義と境界線の意味変容－南東欧と東アジアの比較的研究

研究課題名(英文) Regionalism in the globalization era and the meaning of Border: Comparative study between the Southeast Europe and the East Asia

研究代表者

定形 衛 (Sadakata, Mamoru)

名古屋大学・法政国際教育協力研究センター・教授

研究者番号：20178693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：南東欧の新しい地域主義については、これまでEUおよびNATOの東方拡大によって促された地域主義と国家の加盟競争などにあらわれる権力政治的側面が強く認識されている。こうした南東欧での研究と比べ東アジアの地域主義はASEAN諸国が牽引力を発揮し、地域の大国である日本、中国、韓国が連携するかたちをとっている。そこでは「ASEANの流儀」という、あらたな国際秩序観と国際政治の手法が有用であり、境界線は分断や対立ではなく、歴史的なアジア的国際秩序観にもとづく友好の架け橋といった意味が定着していることが鮮明となっている点を確認された。以上が本研究における成果である。

研究成果の概要(英文)：In the region of Southeast Europe, so-called a new regionalism has emerged after the end of the Cold war. This new regionalism in this region is intimately related to the two eastern enlargements of the EU and NATO in the post-Cold war era. In this process of making new regionalism is obstinate the rivalry between the regional development and national interest of each country. In contrast to the Southeast Europe, the new regionalism of the East Asia, the ASEAN countries are playing a driving role of the development of this region. In addition to this, the so-called "ASEAN-Way" makes an active contribution to the new point of view of international politics and international cooperation in the contemporary globalized world. These are the main research achievements.

研究分野：国際関係論

キーワード：南東欧 東アジア 新しい地域主義 境界線

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始時の背景としては次の二点を挙げることできる。

(1) グローバル化時代、冷戦後における地域主義研究の継承と発展の視点。

冷戦の終結とグローバル化の進展のなかで、地域主義に関しては、現実の地域協力枠組みの発展がみられ、また学問領域では、新たな「地域主義研究」、「境界線研究」という研究領域が開拓されてきた。21世紀になると欧米では、政治地理学、国際関係論、地域理論研究といった学問分野で、地域主義、境界線の認識変容と国際政治全体の動態的変動を関連づける研究が発展した。フィンランドのリカネン (I. Likanen)、タミネン (T. Tamminen) の境界線研究やその他ドイツや米国でも境界線研究が従来の地政学研究の枠をこえて展開されてきた。これらの研究はグローバル化とナショナリズムの間に位置する地域主義を、その質的变化や量的規模の拡大、さらにこれにともなうアイデンティティ変容を課題としていた。研究代表者は南東欧地域における旧ユーゴスラヴィア紛争後の地域主義の可能性や境界線の意味に関心を有し、加えて政治的、経済的にグローバル時代の主要な地域となりつつ東アジアに研究視座を加えて、両地域の比較研究の大切さを認識していた。

(2) ヨーロッパとアジアにおける地域主義研究の比較的視座の確保。

研究代表者は、これまで南東欧地域研究を中心に EU への加盟問題における地域主義の発展、および旧ユーゴ紛争に関わるポスター研究、地域アイデンティティの変容といった問題に取り組んできた。また、アジアの地域主義研究については、中国の大学 (成均館大学、復旦大学、華東政法大学、中国政法大学) との共同研究に参加するなかで問題関心を深めた。つまり、ヨーロッパでは、90年代以降になると旧東欧地域への「EUの東方拡

大」「NATOの東方拡大」という二つの東方拡大がみられ、グローバル化における市場拡大、安全保障の規模の拡大といった動きが進展した。しかし、こうした「東方拡大」は、ユーゴ紛争を経験し、また歴史的にも経済的後進性と政治的な一体性に欠けていた南東欧地域では、内発的な地域アイデンティティを構築ことは容易なことではなかった。

他方、アジアに目を遣ると、ここでは冷戦の終結によって東南アジアには ASEAN の拡大にみられるような地域協力の活性化、経済規模の拡大など地域アイデンティティの新たな進展がみられている。しかし、東アジアでは、冷戦期の分断状況と対立が継続し、新たな時代を切り開く協力関係は見出し得ないでいる。日本においても、「東アジア共同体」の可能性や冷戦後の東アジア協力についての研究の活性化が見られることは周知のことであるが、境界線研究と結びついた研究や、その地域比較的研究の観点からの研究の発展が一層望まれるとの意識のもとに本研究を開始したところである。

2. 研究の目的

冷戦後の国際政治研究において最も注視すべきことは、グローバル化とナショナリズムという地球大での動きと国家および国家内のエスニック集団のアイデンティティ強化の動きに挟撃されてきたなかで、両者を橋渡しする形で表れた新たな地域主義 (the new regionalism) の活発化である。本研究では、従来の地政学的観点から発展してきた機能主義的、構成主義的観点での地域主義認識に着目するとともに、それと密接に関連して登場してきた「境界線」研究の双方から、現代の国際政治における構造変化、アイデンティティ構築の変容といった問題を取り扱うが、その際ヨーロッパにおける南東欧地域とアジアにおける東アジア地域を比較するなど、比較動態的観点に研究視座をすえることを目的とした。

南東欧と東アジアの地域主義と境界線問題の比較研究を目指す本研究は、それぞれの地域の内的な論理と実践、外からの大国や国際機関からの関与や介入の双方向から研究を行うことがなによりも不可欠である。また、そうした理論づけと実践の狙いや、その評価をあわせて行っていかなければならない。グローバル化の内実とその変容、新しい地域主義の実態、国際協力、国際的関与のありかたにまで目を配り、学問的にはあらたな評価の基準とそのため概念提示を主要な研究目的とした次第である。

3. 研究の方法

研究代表者は、南東欧のセルビア、クロアチア、ボスニア、ブルガリアでそれぞれ半年から2年間にわたる研究活動をおこなった。またアジアにおいてはこの10年ほどの間に日中韓の研究者交流事業、インドシナ三国やインドネシアなどの研究者との交流があり、こうしたネットワークを活用しつつ実態調査と理論研究を主軸にした。具体的には、セルビアの政治研究所のジョルジェヴィッチ教授との共同研究はきわめて有益であった。研究代表者は同氏を2013年12月から2014年2月まで名古屋大学国際法政教育研究協力センターの招聘研究員として招請し、この間、南東欧の地域主義、紛争解決にともなう境界線の変容などについて多くの議論をし、研究報告会を通じてその後の研究内容を深めた。

東アジアに関しては、中国社会科学院から博士課程に入学した王氏との共同研究を遂行することができた。また、旧知の中国政法大学准教授劉星氏との交流をふかめてさまざまな視点からの研究をおこなった。東南アジアについてはとくに「ASEANの流儀」の概念の研究を中心に研究をすすめた。研究期間内には、ラオス、カンボジア、インドネシア、ミャンマー、ベトナムの各研究機関を訪問する機会があり、研究者や学生への講義などもおこない、現地での学術交流は、新た

なアジアの地域主義の胎動や、境界線のアジア的意味、ヨーロッパ的な地域と境界線の意味の相違などを実感し、研究を纏めるに妻子きわめて有益であったと考えている。

4. 研究成果

(1) 南東欧の新しい地域主義と境界線の意味変容の研究の進展。

南東欧の新しい地域主義については、これまでEUおよびNATOの東方拡大によって促された地域主義との視角から研究をすすめてきたが、本研究をつうじて、境界線のもつ地域内への意味、および地域アイデンティティ形成に果たす機能などについて一層研究を深めることができた。また、これまで築いてきた研究のネットワークをさらに拡大して、クロアチアの国際問題研究所、セルビアの国際政治経済研究所、政治学研究所、と密接な共同研究を行うことができたことは重要な成果である。

(2) 東アジアの新しい地域主義と境界線の研究の開拓。

南東欧での研究と比べて、研究代表者の東アジア研究は、歴史が浅いが、21世紀におけるアジア共同体構築の可能性とそこにおける日本外交の役割にまで目を配った研究ができた点は貴重であった。特に南東欧の地域主義の新たな動きと東アジアのそれとの関連性と比較的視座の獲得を企図していた当初の研究目的を、一定程度獲得できた成果は大きなものといえよう。

この研究は、名古屋大学法学研究科のアジア法整備関連事業に積極的に関与することにもなり、多くのワークショップに参加し、本研究課題の考察を深めることができた。名古屋大学法学研究科の法整備プロジェクトへの参加の過程では、ASEANと東アジアの比較、地域主義と境界線研究における南東欧の課題と東アジアの課題の比較という点でおおくの刺激をうけてきた。

(3) 欧米における境界線研究の新たな展開

についての理論的研究の成果。

研究代表者の専攻分野は国際関係史であるが、歴史認識との関連で近年の国際関係理論の新たな動向にも強い関心をいただいていた。とりわけ日本で 80 年代後半以降おおきな流れとして注目される構成主義的アプローチからする地域アイデンティティの理解、境界線研究に注目してきた。「構成されたもの」「発明されたもの」としての地域アイデンティティ、境界線の理解を批判的に検討することができたことは大きな成果であった。このアプローチと歴史研究の接点や交錯について認識を新たにし、深めることができたことが本研究において最も強調しておきたい成果である。

(4) 東アジア地域主義の新たな可能性と日本外交研究の展望。

東アジアの地域協力は、東南アジアと比して阻害要因が多いといわれてきたが、今日躍進を遂げる地域統合の典型としての ASEAN の研究に踏み込むことで、東アジアの諸問題の特徴とその解決方法、そこにおける日本のアジア外交の指針が展望できたように思う。そこで重要なのは、地域における歴史的、文化的要因からの考察である。いわゆる合意と自発性にもとづく ASEAN 方式を東アジア全体の理念とするための方策がもとめられているのである。それは、日本が冷戦期からひきつづく日米関係の最優先、APEC 路線からいかにして自律し、主体的な外交を習得していくか、重要な視点を提供することにもなると思われる。本研究を通じ、今日の日本外交の課題と使命を認識できた点も有益な成果であったことを付言しておこう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

定形衛、旧ユーゴスラビアにみる「暴力

と利益」の国際政治、法政論集(名古屋大学)、査読なし、No. 255、2014、pp.199-229.

定形衛、柳沢国際政治史学とソ連=ユーゴスラヴィア紛争、研究論集(河合文化研究所) 査読なし、12、2014、pp.79-109
Mamoru Sadakata, *New Regionalism, Border Problems and Neighboring Policy, Serbian Political Thought*, no refereed, Vol.7, No. 1, 2013, pp.5-20.

定形衛、旧ユーゴスラヴィアと境界線問題の諸相、法政論集(名古屋大学) 査読なし、No. 245、385 - 408.

[学会発表](計0件)

[図書](計3件)

定形衛、初瀬龍平、戸田真紀子他、晃洋書房、国際関係の中の子どもたち(改訂版)、2016、pp.129-141頁.

定形衛、初瀬龍平、松田哲他、御茶ノ水書房、人間存在の国際関係論、2015、289 - 315.

Mamoru Sadakata, et, al, *Regional Dynamics in East Asia: Issues and Perspectives*, Seoul, 2012, 23-32.

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

定形衛 (SADAKATA Mamoru)
名古屋大学法政国際教育協力研究センター教授

研究者番号：20178639

(2)研究分担者
なし()

研究者番号：

(3)連携研究者
なし()

研究者番号：